

道徳科の指導の基本的な在り方

道徳科においては、各教科、外国語活動、総合的な学習の時間及び特別活動における道徳教育と密接な関連を図りながら、年間指導計画に基づき、児童生徒や学級の実態に即し、道徳科の特質に基づく適切な指導を展開しなければならない。そのために、以下の道徳科の指導の基本方針を明確にして指導に当たる必要がある。

道徳科の指導の基本方針

1 道徳科の特質を理解する

道徳科は、児童生徒一人一人が、ねらいに含まれる道徳的価値についての理解を基に、自己を見つめ、物事を（広い視野から）多面的・多角的に考え、自己の（人間としての）生き方についての考えを深める学習を通して、内面的資質としての道徳性を主体的に養っていく時間である。

※（ ）内は中学校

2 信頼関係や温かい人間関係を基盤に置く

道徳科の指導は、よりよい生き方について児童生徒が互いに語り合うなど学級での温かな心の交流があって効果を発揮する。道徳科が学級経営と深く関わっていることを理解し、学級における信頼関係に基づく温かい人間関係を築き上げ、心の交流を深めることが大切である。

3 内面的な自覚を促す指導方法を工夫する

道徳科の目指すものは、個々の道徳的行為や日常生活の問題処理に終わるものではなく、児童生徒自らが時と場に応じて望ましい道徳的な行動がとれるような内面的資質を高めることにある。道徳科は、道徳的価値についての単なる知的理解に終始したり、行為の仕方そのものを指導したりする時間ではなく、ねらいとする道徳的価値について児童生徒自身がどのように捉え、どのような葛藤があるのか、また道徳的価値を実現することによってどのような意味を見いだすことができるのかなど、道徳的価値を自己との関わりにおいて捉える時間である。したがって、児童生徒が道徳的価値を内面的に自覚できるよう指導方法の工夫に努めなければならない。

4 児童生徒の発達や個に応じた指導を工夫する

児童生徒には、年齢相応の発達の課題があるとともに、児童生徒の発達には個人差があることや、日々の生活において様々な課題を抱えていることを踏まえて、適切な指導を工夫する必要がある。

5 問題解決的な学習、体験的な活動など多様な指導方法を工夫する

道徳科における問題解決的な学習とは、児童生徒一人一人が生きる上で出会う様々な道徳上の問題や課題を多面的・多角的に考え、主体的に判断し実行し、よりよく生きていくための資質・能力を養う学習である。指導方法は、ねらいに即して、目標である道徳性を養うことに資するものでなければならない。

6 道徳教育推進教師を中心とした指導体制を充実する

道徳科の指導を計画的に推進し、それぞれの授業を魅力的なものとして効果を上げるためには、校長の方針の下に学校の全教師が協力しながら取組を進めていくことが大切である。

学習指導案の作成

学習指導案は、教師の指導の意図や構想が適切に表現されることが望ましく、各教師の創意工夫が期待される。したがって、その形式に特に決まった基準はないが、参考資料として、「道徳教育の進め方 京都式ハンドブック」（京都府教育委員会 平成30年3月改訂）がある。

「道徳教育の進め方 京都式ハンドブック」



京都式ハンドブック

京都府教育委員会では、学習指導要領の趣旨に沿った道徳教育を実施するため、様々な研修や道徳科の指導の手引きとして「道徳教育の進め方 京都式ハンドブック」（平成30年3月改訂）を作成した。

道徳教育の基礎的な知識や道徳科の指導力を高めるため、この資料を積極的に活用することが望ましい。

道徳科の教材

道徳科においては、主たる教材として教科用図書を使用しなければならないが、道徳教育の特性に鑑みて、多様な教材を併せて活用することが重要である。

「京の子ども 明日へのとびら」

「京の子ども 明日へのとびら」（京都府教育委員会 平成19年3月）は、「心の教育」学習資料集である。京都府の子どもたちが人間としてよりよく生きるための基本について学びながら、一人一人に豊かな心がはぐくまれることを願い作成した。「京の子ども 明日へのとびら」は、道徳科だけでなく学校の教育活動全体で活用することが望ましい。

「私たちの道徳」

平成26年度から配布されていた「私たちの道徳」（平成30年度で無償配布は終了、文部科学省HPでダウンロード可）は、「心のノート」を全面改訂したものであり、児童生徒が道徳的価値について自ら考え、行動できるようになることをねらいとして作成された道徳教育用教材である。道徳科はもとより、学校の教育活動全体を通じて、また学校と家庭や地域が連携して活用し、道徳教育の一層の充実に効果を上げることが期待されている。

「道徳教育アーカイブ」



道徳教育アーカイブ

「考え、議論する道徳」の授業づくりの参考となる映像資料等が掲載されている。各紹介されている事例はいずれも一つの工夫の例であり、これらを参考にしつつも、これらにとらわれることなく、各学校の児童生徒の実態に応じて、多様な創意工夫を生かした授業づくりを進めることこそが重要である。